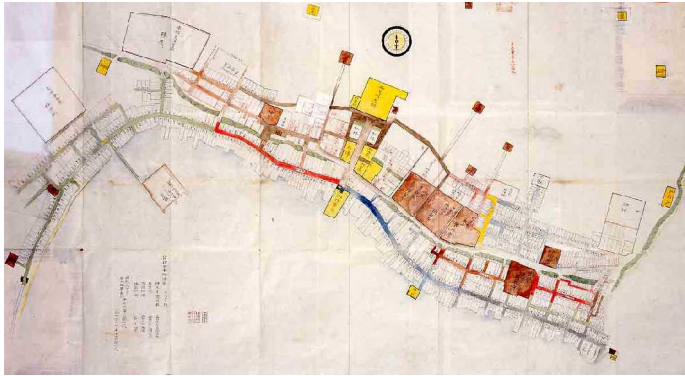


古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
古文書班
2006.8.25
第10号

「古文書倶楽部」部員募集。
月一回の勉強会で古文書を
翻刻し、研究紀要で発表。
詳しくはカウンターまで

「秋田藩の海防警備展」前期展示の魅力満載



リーフレットで紹介しきれなかつた前期開催（八月二十五日～九月十九日）の史料を紹介します。

箱館細絵図 全 (巻71565)

安政年間に箱館留守居を勤めた長瀬隼之助の家に旧蔵されていた絵図です。箱館山の麓に広がる町の様子がよく分かります。

秋田藩函館守備之図 (巻1503)

大正三年（一九一四）作成の絵図です。文化四年（一八〇七）八月四日、七重浜陣屋で幕府要人の見る中、軍事訓練を行います。この訓練の様子を描いたのが、この絵図です。

松前箱館絵図 (巻C1364)

箱館の様子が鳥瞰図風に描かれています。

南部屋敷図 (巻C1372)

箱館市中にあった盛岡藩の陣屋の絵図です。

唐太島クシユンナイ弁天社へ唐人渡来之節掛置候絵図 (巻C1398)

文化四年の箱館出兵に関する絵図が十二枚あります。この中には、文化三年（一八〇六）に樺太のクシユンコタンに上陸したロシア人フオストフが、焼き討ちした弁天社の鳥居に打ち付けた真鍮板の文字を写した絵図があります。（但し史料にはクシユンナイとある）

大山矢五郎日記 (AH393116)

箱館出兵に際し、物見を勤めた藩士の日記です。出兵の責任者である陣場奉行の金易右衛門が足繁く幕府の役人と接している様や、軍事訓練の様子などがよく書かれています。

松前箱館御加勢日記 (A39312)

横手給人の上遠野子之助が書いた日記です。横手の部隊は箱館へ行くことなく、久保田城下で待機のまま横手に戻りました。

日記には、出兵した藩士に支給された合力金があり、久保田給人は四両で、横手給人は三両の記述があります。ここから、久保田の藩士と横手の藩士との間に格差があったことが伺えます。

沼井四郎兵衛日記 秋田県立図書館 庵97

箱館に第二陣で出兵した藩士の日記です。第二陣は久保田を五月二十九日に出発し、能代から海路箱館を目指します。しかし悪天候により箱館に到着したのは七月二日でした。

日記は家老から箱館行きを命じられる所から始まり、箱館に着いて「ご飯と漬け物は一日三度、味噌は朝一度」の記述で終わっています。大坂の陣以来およそ二百年ぶりの戦争に参加する武士の本音が随所に書かれています。

松前御加勢日記 (A39313)

前項の沼井四郎兵衛同様、箱館出兵の第二陣に参加した藩士の日記で、著者は分かりませんが、箱館の動静ばかりでなく幕府や藩の関係法令、旗指物のデザイン等も記されています。

ぎよとらよん 禦侮 儲言下 (弥高131136139)

天保十二年(一八四一)、佐藤信淵が七十三歳の時の著作です。自走火船が浜辺から出航し、火薬の推進力により外国船に近づき、至近距離で攻撃する戦法をご覧ください。

異風砲異様船製作記 (弥高147)

外国船の来航を阻止するため、鉄製の「異風砲」を、丸太を組み合わせて造った「異様船」に載せて戦力とすることを説いた本です。

新製小艇放大銃纏 全 (弥高148)

嘉永元年(一七九八)八月十五日の日付があり、この時佐藤信淵は八十歳です。

あり合わせの小舟に大口径の大砲を載せて戦力とすることを説いた本です。

山本郡八森村絵図 (貞CI132)

現在の八峰町八森に築造された台場の絵図で

す。「山本郡八森村海岸絵図」中に描かれている台場が詳しく描かれています。

口上覚 (弁5003)

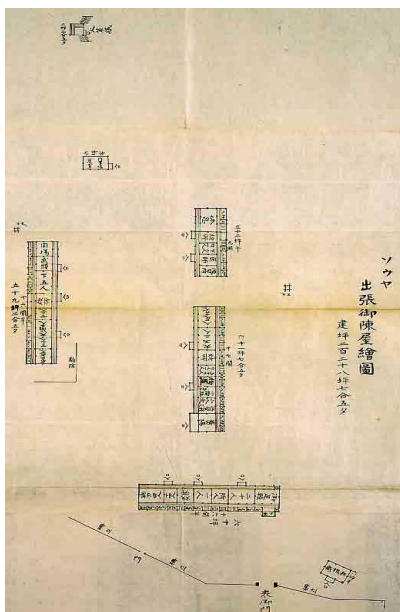
男鹿半島に「渡部村」を開いた渡部斧松(一七九三-一八五五)が、嘉永七年(一八五四)二月三十日付で秋田藩に願い出た口上書です。

口上書には、沿岸警備のため渡部村の百姓六十人を足軽に取り立てて、自分をその指揮官に任じて欲しいことが記されています。

外庄の風潮を、身分上昇の機会として利用しようとした農民の姿を見ることが出来ます。

宗谷出張御陣屋絵図 (混251177)

安政の蝦夷地出兵の際に秋田藩が宗谷に置いた出張陣屋の絵図です。



宗谷詰合日記 (AH312198)

藩士長山茂が万延元年(一八六〇)九月十三日から十二月晦日までつけた日記です。越冬のため宗谷陣屋を閉鎖して増毛まで戻る道中や、増毛での越冬生活が詳しく書かれています。

現代とは違い、暖房設備が十分整っていない北の大地で、厳しい環境と戦っている秋田藩士の姿を想像することが出来ます。

演説覚 (AH3121267)

安政四年(一八五七)八月に下級藩士水戸部正蔵が藩庁に提出したと思われる史料です。

史料には、蝦夷地に赴く郷夫が「死地に赴く」と忌避するようになり、村の中で金を準備して人を雇い、その人を郷夫として蝦夷地に送り出している実態が書かれています。

それなら罪人を蝦夷地に送るべきだ、と意見している箇所があり、明治以降の北海道開拓に通じる点で興味深いです。

石井忠行日記 八 (混4231618)

郡奉行や財用奉行を勤めた石井忠行が、慶応元年(一八六五)から二年にかけて増毛に詰めた際の日記です。